朝美巡嶋記

第二号

香

館書庫
冊數
1
6
1
6
1
80
169

へ13
3093
10

岡花和吉

九
文月二三日

朝夷巡嶋記全傳第二編巻之五

東都　曲亭主人編輯

初輯第十九

野干玉の罩燭
蘓弥深の袖巾

嶋室平師住八義秀よ投折うれてまぐれを起と苓の花。おほ兵卒ハ
駁あるさろともとりよでうもよ志を激して匍匐ぐらう大地を敲。八犬
者共うが。などそ虚乱く熟視て居縱朝夷ゑれバとて鬼神わハよのあ
ゑれ。ハも怪死て歩行不自由ゑるめく。軍配ハ裏よあり掛ことや
くし。と敦圍バ駁矢ホ有理と云ふ。そして多勢を憑む群雀。忝の川穂ま
著ごく。咄こ嘯て鼓て蒐しバ。めくーやと義秀ハ藪よ添こう杉の立木を。
根投ふ丁と引抜く。搞起失せ難倒。縱横ま礎よ拉けバ廣光ゑ亦双を

吉田屋
吉田屋
嶋室平師住八義秀

門 へ13
號 3093
卷 10

うち振り。追立追詰攻戦ハいとも烈し。死大力風勇力。當るべうもあらざれべ。四五十人の雑兵ども。半ハ矢庭に命を隕し。半ハ地上に打居られて。堂あハーて拝むのミ。平張伏て長吠せり。義秀呵々と冷笑ひて。彼人木を礮と投棄て生きよ。勸解おバ暫め。さのミハ益の殺生あるん。さらハ室平奴ハ。あの室平奴ハ。癖者之ゆゑ。来よと跳懸て。宙よう提て。廣光がほとり近く撲地と推居汝ハ是曩ゆゑ。絡庵ゆく。飽まで。これを挾せーが。いふ事を。ちっや。ちゆかよ。汝ハ民を虐げ。私欲に耽るものあるべ。公頼の時夏を損貧てをきく。領主の聽を暗まー。逆徒五頭平が詐言を幸ふして。温順の君子ら義邦を捕ん。とも。是甚麼なる道理ぞや。これ幾遍抜時夏を。凋殺さんとぶーが。義邦の面に覿く。故ーお死ぬを知らざるや。今亦汝を殺さんも。鼠を猫に見一般。雖然汝がごとき。ハ則民の蠧毒之。恁弱不具のものとおもふ。虎を深山に失ひ似くう。且く苦痛いと忍べらーと。罵懲して。脇を揉ひて。腰骨を蹂躙ハ。室平ハひと泣く声霜夜の虫より細くうけて。義秀ハさもこそと。項上凋てうなづ。汝ー先非をあらバ。吉見冠者に罪おきよを左典厩へ。義兼に。ゆえあげよ。又時夏が。ト絡に與し。密書あるよあり。汝も。先非をあらバ。汝が。行く時夏が隠慝を。頭せ然ぎハもれ又之を。来て。汝が首を。ーう。抜乗ん項骨ふよく覚よと。再三ビ呵嘖て。藪の中へ。礮と投入れ。又雑兵ホを。搔廻て。貪竹叢へ投入るこよ。ゆ。毬あどを弄ぶく。死るものさ迷ものとあ。ら師任が徒を。藪の中へ隠れ。再度の追兵いで来ること。遅ん。その隙に廣光を。扶く。封彊を。出ずやとて。後くまさを謀るべー。當下廣光ハ。恭ーく。義秀に。再生の恩を拜謝ー。脚て宿所に。ひつ。義邦ハ并平共侶加北を。投て。脱去る。絆の趣を告んとするに。義秀これを。あへぎいおそのゆハ故ありてこれを。昨夜少ねらう。これを告ぐ。あれど。

燕居安坐のと紀あ〜ねバとく禍を避るとて。肝要あるめ。血よ染る衣をうて。飽まで食して走るぬ〜といつて廣光おろぬて酒食をとう出て。義秀と共よたうべく。割籠さ〜准備つ遽しく衣を脱更姿を窶し。笠をふかくし。両人夵一宿所を出ゑバ。義秀ハ先よ立て。大石山ゆどるけ入りぬ。のと紀廣光袂を掖て。某ハ妻とみどもを。赤貝まで出しおき紀ろいろゆせまと不樂しいの密語〜うち微笑こいおそのすハ心安ろれ。某昨夕ハ出ぜよ。赤貝の郷ふして浅良井ゆ。對面せり。これハ上野のゝ〜より来つ。婦人ハ人よ偽りてその家よ入らんとせしと紀。灯光よ面をあ〜つ。迭よ呼ゆ呼ゆ〜れ。躰てその輿よ聚會て五頭平ゆ。時夏ゆ奸計冠者ハ井平ゆ資よりて。共よ北国を投て脱去らんとせ〜れ〜る。浅良井どゆよこれをゆ特よ彼〜太郎とゆんいと精悍紀ものとゆつれバどゆ肺肝を流示して。おづこの親苗四郎ゆ。亡骸を葬せ。迦婦人擁児よ〜大郎を。

傳ひてその夜の中よ越の中州婦負岩神の里正ゆ。稲向判五許遣〜。うこの稲向ゆ。の。某と舊縁あり。曩ゆ某加賀の小松へ越くゆ。簡様〜このゆあり。不憚ゆ。女兒友鶴ゆ危窟を救ひて。恩人一三といつゆのまゝ。環會媒妁せ〜れ〜辞まゆ。なく。友鶴と娶ゆつ。岩神ゆ歩を駐めて。この春を迎へゆ紀よりて某消息と和慶。内室子息のうへを判五友鶴ゆよ憑遣〜。ろ〜ゆ。心安く思ひぬ。只心ゆ紀ゆ吉見ぬ〜の往方を佐味笠内高利ハ漁倉殿頼家ゆ召使れて今ハ加賀よハ〜ゆ。と。ゆ〜ゆ〜ゆ〜遥と北国へ赴紀ゆ。進退ゆ便ゆ〜ゆ。加ゆ内室をゆ夜ゆ中よ起行せ途はしてあ〜てあ〜バ冠者と井平よ曲を告て。ゆ〜共よ岩神ゆ。稲向許走けて。う太郎ゆ意ゆさせて遽しく出ゆ。和慶のうゆ。心ゆ〜ゆ。ゆ〜バ。某ハ暁ゆ歩つゆじて。ゆ〜程よ果て。謀る所よ違ゆ。和慶ハ対ゆの大勢ゆ。巻れ既よ危くゆ〜ゆ〜バ。ゆ〜て捷徑を驀直よ走り近つ紀室平ゆを拉紀て

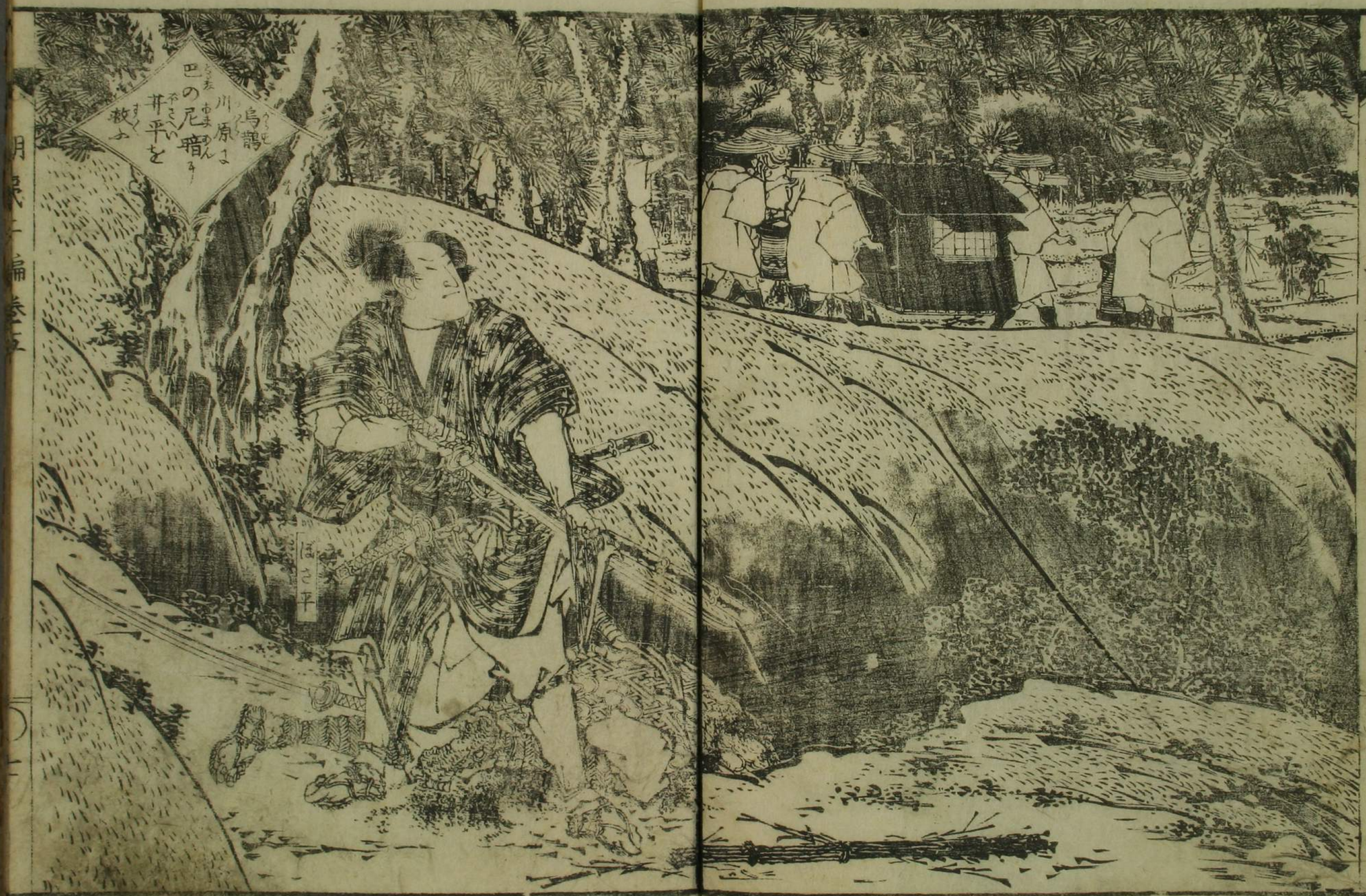
輙く救ひ給ふべし。不思議の再会素懐と称ひぬいと歎くべし。と縁詳に説示せば。廣光いよく感謝に堪ず原来浅良井小三郎ハ越路へ赴給ひ一行亦是和君の恩澤なるべし。冠者ハ急て帰ん和君ハ一日も早く此地に到著ぬ。今この悔ハあるまじきよとつひに涙を拭ひ嗟嘆し給ひしが義秀乃も亦嘆息し夫命必盈虧あり。離合の時あり人よく世に逆ふ。縁竭ぬハ邂逅に赤後冠者と環會なんとすれも豫てこの約束を違へじ。と云へ。ろバ再遊の後を要時も忘れ給ふその期に後きてるるあるべ。父と先師の年忌に丁度バまづ下総に赴て間中の野寺に来詣しそこの地へハ来つる和殿主後固より罪なし。さるとて今ハ云ひ紀ぐ云ん。ある命を全て見る時を俟んおのおのもかくなる路を暗まし。脱去るとまたいのち街道あり進んずハいと危き所なれバ一両日ハ山路を躊躇て岐岨路に出るバ中そろべし。さのみ歎給ひそ。と慰められく。廣光ハ一浅に及バぬ感服して後おのり。又先に立つて樵夫あるに山路を尋つるなくも辿てその次の日に下野尻に。蔦の巣に来るべ。やがて岐岨路に赴ぬ。詳分両頭さても野時夏ハその聽音に井平を忘野のくに遣せ給ふ夜ハ早二更に近つけども彼ものこるまぎれしろバ。ちく心に疑ひつ生才学なる小厠を召びて。義邦が宿所のやうを竊に探よ。と遣せ給ふ且て走りかへり。とく遅し。と焦燥て異なるハなやと問バ。さい冠者に今宵轉宅せるやん奴婢仍潜やうに雑具を出せ。とのを時夏ものもて原来これを出授て井平奴に告なんに義邦を走しハ百計千慮もその徒に。まぐ遠くハ去べ。然バとて。目代に告領主に許追捕の士卒を催さバ。時移りて及びがたんその方定なるに依ど。夜をあらて去く客あるバ。山路の陰岨に憚て。奥街道へハ赴くべ。挾野より勝澤田中を投て鎌倉道を追蒐バ。一山伯ゞ程中を

とあるへんへ出くゐ井平ハ心をせろーして一大事をこゝせーしを怨みれる紀く彼奴ハ生拘ろくハ創ホーして嘖ゑハ熟こゝ陽を冷をと紀ゑー馬ハ鞍ゐ紀松明の準備をせばやと焦燥く。野袴の稜袴を力を引提く外面へ出れば馳く牽よ馬ハ。馬ハ冈ゑとうち乗ゑバ。若堂奴隷五六人ゑれ後ゑ。ド。と馬ハ引きこゑ。あぎく引添ハ喘くゑ従ひる。時夏ハ鞭を揚く一騎馳ハ進こて。挾野の船橋ゑを渡こて。足掻を駐めくゑ。ゑこゑ。従僕一人も来ざりゑゑこの川ゑ。あゑこゑハ五頭平ゑ隊下の野客ホ駭こゑ。河原ハ烽火を立るとき。ハ忽地ハ集合こゑん。豫て空つこゑあれば。彼ホを謀りて援ハせばゑと既ハ準備をこゑゑゑバ。馬ハ。こゑ。この河原ハ。まづ狼煙をゑ立こゑけゑ。こゑこゑハ。彼此ハ。散在こゑる野客ゑ。五人三人ゑ来る程ハ暫時ハ三十餘人を拘こゑ。時夏編ハ欺びて。野客ホ。ゑこゑ。ゑこゑ。

中ハ。ゑれを認こゑめあゑべー。こゑこゑハ力野太郎ゑ同郷の浮浪人吉見冠者美邦も早蝿ハ一味のゑれゑーゑ下郎井平ハ謀られて心変こゑゑ。渠ハ舊悪あゑめゑれば領主ハ告ゑこと叶ハゼ鎌倉へ直行せんこて今宵井平共侶ハ上野のゑこへ走こゑ。件の風声ゑゑも聴えて五頭平ハ忘野ゑ名ゑも知ゑ紀土民ハ生拘ゑ。既ハ獄舎ハ繋れゑ。これ尉憤ハ沼堪ゑと美邦ホを撃ん苗ん。とゑくまゑハ追来つれども如法夜ホーして後僕続ゑ汝達いゑれを資て彼両人を追撃ゑ紀。ハ早蝿ゑ沼ハ怨を復こん各位同意せゑゑ。と嫌せバ衆皆大紀ハ驚紀頭領捕こてハ吾們とゑも既ハ危ー力ゑくゑの吉見とゑん井平とゑハ白状を撃ハ殺して退散せんと一人ゑハ食点頭。ゑハ。ゑこゑこてゑあゑこゑき夜ハ続松ゑこゑこゑいと賺ゑ行客ゑく中山道を投てゑくゑ。ゑつゑハ今のこゑゑき彼美邦

ほよあるべきやとて時夏吟味あるべし。こゝを疑べくんば。とく追留よ
と奬して再び馬ようち乗る打時夏ら従僕ホハ槁をさして走れり。
さゝバ進めと野客ども周ら熟路のるあるバ所得兵器を引提て馬より
先ら逸足半して飛鳥の如く追蒐ら。さる程ら美邦ハ井平共侶通宵
急ぐとまれど野千玉の烏夜ホーあるバをのづゝ歩の運も果敢ども廣光
ホゞるの今さゝに心ら〻れいく遍ら後方をえ〻を立留り候とハ有ら小夜
深く暁ちくあ〻ら比ら猶下野の封疆をえ〻れく挾野の津のあをこ〻勝澤の
松原に直く魁山折をあまた人駿散動紀て美邦を迎をとゝ声遥ら来て
ゝ〻六両人齊一立あゞを。追捕の兵卒近つ死ぬ。あゝて防戦ぞハ四く先
とそ〻ま稜ぞ〻ん。さいて左右ら立ゝれ。ゝゝ松を木盾ら〻て刀の
鞘ら〻ら湿し。捧ゆゝてまつ程ら真先ら進ゝ来ゝ一ト隊の野客十餘人単燭

ゆゝて〻して走を近つゝ佶とゝ〻く。ゝハ白徒ホハ〻ら〻ゝを〻ゝ〻せよゝと
聞紀て。独ゝんとまれバ美邦井平双を引接きをゝ逆へゝ競ひゝ〻るを
礙と砍り誑引ませて八丁と砍るゝ煉の刀光電光石火と晃し殺ゝ靡け一上
一下秘術を盡して瞬間ら五六人或ハ大袈裟車斬真額梨割乾竹創ら
身首処を異すて仆て死骸累ゝ〻う。残ゝるものハこの勢ひら舌を巻紀恐戦
ゝく。踏足さへら定らぞ。道の路ゝ凍解ら単皮脱あへぬるの如横死を
逃ゝ〻う。誘この隙ゝと井平ハ美邦をいそ〻ぐて双を鞘ら納しバ再び
吟ゝ男ら人馬の足音程遠ゝ〻ぞ裏紀ゝ〻う。井平騒ぐ氣色なく某ゝら
踏留ゝて殺散しゝひゝん。冠者ハゝ〻く延させゝと只啻ら練ゝ〻ゝの美邦
一歩も退ゝ〻ぞ。追兵ハ殊更大勢なゝんら。何でら和殿を捨死て何国へゝ逃
隠るべき。只共侶ら死ぞゝと進むを急ら推ゝ〻。貫道ゝ〻ぐ策ゝ鼠を鞘ら器を


烏鵲
川原よ
巴の尼暗
甘平を
救ふ
ほさ平

忌むと、へて真の追兵なるべを。命を限りも禦紀みつ。這奴ハ烏合の野客。
まをもて備はるべ〳〵に隊伍つゆ〳〵整へぞ。数十人いでまるる殺散さんことい易し。
願りは途より時夏は駈催されしあるべ。さりとて由断をべらるべ案内知るるの
あるに二隊まうられて後より挟まて攻殺らば防禦わとく難義は及ん和君ハあを
退却て鷹崎川をうち渉り二の目を戍りて俟へと誘るおしもあれ。西は當りて
蕉火の光隠ことをるくるれば美邦遥はんと。そ原来後陣は亦敵あいて
殺とんと。後びる三尺帯を揺締つ。西を投てぞ退きぬ。詰処は時夏ハ後僕
野客二十餘人はよく蕉火照させて。蟇直は追蒐来つ。烏夜は立在む井平を先と
推とう巻せて彼生拘ると。喚ばハ早雄の野客六七人。含る蕉火投りけて面をぞ
嘯て蒐ばハ井平ハ秒高紀松の蔭は隠れつ。頭れつ。千変萬化をを畫を。
いとる烈し紀人が風は一隊の野客砍立らと。殘負を棄て退げバ乃野ぶ後僕入ぬ。

後陣の野客もろ共は又引包で。井平ハ美邦を延さんとのこもひしぬ。
整乃ものく撓ぜ〳〵て。五六人を砍仆し。頻は進で戦ふ程は野客ハ拄るもく只
火攻は甚はやて。ちも道芝は火を放て風上ようぞ攻くる天さへ陰る暁くは東南の
風吹浚は。その火走りて井平が前後左右は燒くぬ。縱三面六臂あり。脱れ
ぐるくかをるおり。颯と吹おろも風のまく。驟雨頻は降そ紀て。疾と盆を復を
如く忽地は火をうち滅て。黑白をうるでなるそ。井平不思議は便を紀く。
多勢が中へ割て入り。衝と掛接て息も紀吻ぞ。武蔵のくるぞ走りるおりその途を
うちぐ〳〵ハ敵又蹤を眼て来るも美邦と間を隔て。後ぞもく延さん紀へ時夏ハ今
さふは井平を整漏して馬上は身を悶。澄を蹴立て。何延まぞと追蒐ーが雨ハ
ものく降る後は道のゆるは蹄泥て馬上ぐ〳〵陵れうこハ朽ぞ。焦燥て拍りつ
鞭つ遣んとるは疲れ馬の癖ぐれば松の株は跌紀て横ざは仆るれば。ハ

敷れて起もゐぞ。朝ハ只泥に塗れつゝ當下從者ホ走り寄つ。声をかぎりに辛しろく。
扶け起し馬を牽起し。主を勧て行ども程に田中の家に鶏鳴て彼雉時に有りや
そうてぽし程に野寝ホ八天の明たとかうをとそく影護ひつ痩肩を肩にうかけろく。
きのふに多く影をかくしつ再てあくに集合ば時夏八今さら言せんすべもなかりのら。
かの懲を手中の從者を摺し戋邦を漏もとも井平八東へ走れりまし追蹤者も
狼留を八世の胡慮になりんのこともしや要時八後るとも烏鵲川のほとりまそ。
追着んと疑ひまじ者共続けといちはやく歩より進めバ從僕ホ八馬を牽起て追に
程に雨歇て雲八おさゆりてかく先もくらきもりさる程に井平八東を投て走りて。
烏鵲川まで来まそまじバ天八わらくと明わく隨に雨さ既に晴たれども航人が
いまださなくてや舩八前面の岸にあり追兵逼らバいかせましとかふに心安うぞ。
されバ水際に五六人轎子を舁きし舩のよるを待つもありつくと見入るに。

轎子の内なる八五十あまりの尼なりけるも容去めとおぼしくてそが傍ともあつべ
ねつる五六人八從僕也焼さしる蕉火を砂の上に投棄て蹴揚の泥を洗ひおとしつ。
舩いと遅しと呟くやり井平八又それを見て郷に勝沢の松原より西に丁て見えつる
火八その蕉火ホあらで来し彼徒にこそうるか人を憑ばやと思ひしかバ遽しく轎子ホ
ほとりく近つき跪て件の尼にうち對ひ忍辱慈善を宗とし給ふ聖と見奉り
ぬれバ御蔭に立よりさむるも賤の追兵を殺脱て稍あまで八来つれども前面へ
渉もべらもあらバ後ホ八追兵のいそぎ来るあり先ホ八舟人の資なし進退究りてあふぬ。
あはれ法衣の袖に匿して救せ給へとうち歎けバ尼も亦つらくと見てやがてうち
点頭ぬ十悪の罪人なりとも既に懺悔の心あらバ仏の慈悲に漏ることなかし況て
今なる所極悪の人ホ八あらじ縁故八ともあれいぞくまてにおもろぬなり然
とて野渡のふすなまバ身の去が隠れ由もなし此轎子の内に潜びて前面へ

ゑさしあひ孤といと憑しくうけうつ。ゑぐ男ハ艇て轎子を出て床几よ尼をうけ。
從僕よあろ姐さして。濡ぬてゐ侭ハ井平を轎子ゑぐ隠しゐ浩延よ時夏ハ
從者共倍よ泥よ塗れく喘こ追蒐来つ水際よ立く彼此を再三びんゐまよ
舟人ハいまゑ岩ぐ正しくあくへ来つんよ翅をくハいゐやて。前面へゐ沢よあん
あゐ不審。と呟尼つ。轎子よ目をつけて立ゐんとゐる程よ尼の後僕推禁め
こハ狼藉ゐう。嗚乎なうといハせもあくぐ冷笑ひ大罪人を舎蔵ハ出家ゑ
とも科ハ脱ぎ沢。吾倚を指て狼藉こ嗚呼こゐよ汝ゆて狼藉めよ荷擔る
嗚乎の癖者なゐべゐれゐゑ疑ひハくよあう其処退ゐ沢やと勢ひ猛く掻除て
あんと沢。その尼ハ床几をゑおちく遽しく轎子の戸口よ立て遮り留め。ハ
あゐぬ壮士ゐ。家ゆてハ門戸あう。途ゆてハ轎子も亦是一家よ異
ゐぐ。出家とゐひ悔りて狡縁故を告ぐて。ゐをうけらくハ狼藉ゐう

ぐや。嗚乎ゐう所行よ仏ぐや。といハしく時夏ゆく逼立口さゐしくゐ
ほざいゐう。然ゆて名告て呼せん執拗時ハ所縁のゆ足利めよ扶持
せくゐ刀野時夏とゐぐゐ七命不美の家僕井平。ゐのゐうへ逃来ゐ尼
その景ぐゆんせざゐハ。舎蔵ゆてゆゆゐんゐぐゆゐも轎子の戸を引
ゐおちて示ゆよあゐ沢ハ。ゐぐ疑ひを繹ゆわんや速よ出ゆ沢ハ後悔見
いゐあぐゆと敦園ハ尼ハ只その顔を熟視ていゐ笑ひ時政ゆの縁者ゐも義兼
ゆの親族ゐうゐも武断よハ拘らぐ。ゐのぐ寺法よ任ゐゆと鎌倉の古将軍頼朝ゐう。
御教書をゆ一ゆ沢。伊豆國藍玉の女僧寺ハ三位頼政卿の後室ゆ沢ハ。
菖蒲の尼住持ゐう。吾倚ハ尼公の弟子ゆ名ゆあきゆゆよゆ信濃國
川中島ゐう善光寺へ代参をゐけゆゐう。賽の路次ゐぐゐ寺法を枉ゐよゆ。
凡當寺よ入ゐうゆハ不美ゆ命の男女とゐよゐ。助けらくぐ定法ゐゐバ天子もこれを

処置なさんハ。又将軍も辞ひなんハ。執権國司といへバさらに和殿などが及んや。舎兄ハ
さりながら縁の如し同じくり吾儕ハ知らぬとこそ断りても異浅なれバ鎌倉殿頼家へ訴へ
あげて是非の裁許に任せ給へ。又これを尼公へ披露して住持の随意となるも計ひ給ふべし
よりて許しがたしいかがせんやと問ふに。されバ時夏ハ眼を瞬きれいとむつかしら隠して握ぎ
拳のもて。尼が臂を捻ぢつく其ハ我に逡巡して頭を掻把りしいきさ疑心今さらに。
これかう辞を失ひぬ私の怨なるに官蔵ハ願ひ候ひし不礼ハ許し由へいひしとハいひまぎく
轎子の。こよなきを処置めて去らぬ死人におまかせ疑ひハ釋きやと窘められて舌うち鳴らし
命に冥加ある奴ぞ然らバ去なんと。衆皆がら笑る従者を疾視つゝ
げにつ舊来し轎子へ引きもしもあらぬ航人ハ舩をあきさへさしよせさう當下尼を
轎子をそがまゝ船に扛入させ主従齊しく乗て去るに前面へ至じて中嶋村のほとり
に。又且く憩ひしかバ。井平ハ遽しく轎子より立出て尼に對ひて叮嚀に再生み

恩を拜謝し。其実ハ岐岨路のかたへ赴くものでびへども。侶伴なる荘役を延さんとぞ途
引ちがへて去るさへ来りし彼人のかたへ心ひとつに貞の眼をぬかれたりとひ果て立んと
するを尼ハ急に推禁め同憂を相憐む信ハあるべきなれども刀野とやらん人を
跟て来ハ寃んも謀ものに因より吾儕ハ使者なるに既に和殿を舎匿ならば
尼公へ咎へあげもし放遣して又さらに追兵のかかる内ならバ彼に越度あらん
がことをもろく中寺まで伴ひ今もと又々さじとも尼公のみこころざしなれバ。伊豆
の八坊料得もども菖蒲の尼ハいとやさしき年よりせなれバ孫駿河前司廣綱
朝臣心をくだく思食て宿所のほとりに草庵を修理せ祖母の尼公を藍玉より迎
とりせなひて今ハ其処なぞをしまし廣綱朝臣ハ源氏の嫡流仲綱朝臣の恐子にて
頼政卿にハ孫なりし。鎌倉創業のその比より頼朝卿に従ひなひて氏一族の上臈
なれども世間を形なくせたるをしまして建久元年十二月前官爵を棄妻子を

携武蔵國埼玉郡大田の荘に退隠して遂に又仕へず彩の年月を送りゐるあり。
吾儕は武義の大田の荘へ行くべし。其処まで伴ひ給へといふ井平は辞の越いと難義
ゆハ思へども一旦危窮を救れるに辞せずして去るべうもあらず。彩とハ云ども義邦の何
とうもひあり人廣光に諾ひ。言葉の多くハ覚ぬ。れのこゝろとう武義野の
うけうが花の陰に立バよゆ迷水といふ。せまじと困じ果て。
さて已べきよあらざれ。そう俣尼に後ひて武義野を赴ゆ。くこの夜ハ熊谷の東南
の。戸田の八町村に宿りつ後僕臥薄に入るも。比尼ハ井平を召近つけて。まづその
本貫姓名をとゝ。又逐電せし縁故又その友のうへさへに曲こに問しろハ井平ハ
あらくに匿してハあらうなと。ひかれバ勝を進めて首より尾りまでそうへを
説あり。又美邦のすを告美秀ぐうへさへ。夜とてもに拘ぐれバ尼ハ泣て嘆息。
誠に和殿ハ痛し。北薄命の人なり。加以その友うに壮士達も大ゝなるあらぬ枉屈に

身を屠うていくそのの患苦をあらん。想像ぐゆ哀れに侍り。就くその美秀
とうの人ハ安房大瀬の浪人。朝夷と名告ると欲りその人の乳名を阿三郎
とハいはざるゆと問べ井平訪ゆそをいうやて云せゆひ。養父ハ浅江の
豊六とゆ。乳名ハ阿三郎。といはるて尼ハ目を赤ばらゆ。
原来ハ不思議の縁そう。吾儕ハ則彼人の乳母兼まといひ。乳母君ハ
謂を冒して巴の尼と名告れバ井平ぞ。小勝を拍て驚嘆。これ
あるとハ。ぞうゆ欲び氣色に顕して感涙坐に禁あゑ。朝夷の地語あて
男子ゆ。ゆ。心操ハ豫てぞ。ぬ去歳のその月別れ時まで彼人ハ只
母の前の往方いかゆと哀傷ゆ。ひ出ぬ日ハ。ゆ。その垂乳母に。ひ。
危難を救れ。伴をのゞ身を朝夷ぬ。せまほ。れ。ゆ。ば送まゆ。
再会。その歓びハ。ゆ。して。珠更ぞ。ゆ任せぬものハ有為薄変遠感ぞ

おほせべ紀某とそも幼少より孤となりぬれば友垣結びしの日より朝夷奴を兄の如く弟の如くやよのこと今又あよ尼御前を母とぞ敬ひまつる子と爾一女人孤と
いへば頭をうち掉ていあくまれば僻すあん棄恩無為報恩者と佛は説給ふ
なる。法の首途せし日より浮世のことは忘れ給へ件の和子はなほ子なるぬる母といへば
物休かし生涯面を對せしも恙なくば幸ひあん忘れて年を歴しめそうこそ
人の言葉は絆さしより煩悩の火坑に入らばいかあせん彼人も又如此なり吾倆が
絆となるこそ紀はその志氣遂に弛そ名をとろとろくば侍ん縛のあらをあもるぜ。
朝夷奴は再会のこと紀ありそも尼がうへを告ぬぐ恨こそん抑吾倆は三年来
関の八州を徧歴し今茲正月の上浣菖蒲の尼公は偶し侍りて藍玉院は
杖をぞめ此度信濃の善光寺へ代参に立るは件の尼公の本願なり頼政卿
仲綱朝臣大約兎道ゆて討死せし人々の菩提の為に彼霊場へ三十三度参詣

せんと誓ひていぬる治承のむしめより参詣三十二度に及べる今ぞ一度
なれば九十餘歳になりぬれば扶起居も不自由ゆて結願の義を遂られ
このものこいとうう歎ぜあが痛しさ代参をもそ侍りあるす勤果ぬ吾倆は又四国九州
ぬる。従僕さへは殿ゆて晴ある旅をもそ侍りあるす勤果ぬ吾倆は又四国九州
彼此とあく田國の初念を遂んとやよう。かくれば扶身とあいもあるしが程なりぬ。
然るを母とぬあん子とぬへとそ愛しく歎待れて御歎の森に下るは赤袖濡を
媒あん只因もあく縁もなき紀尼法師とは侍りあるを送は後ゆとるべらしさいあるべと
叮嚀に説示しろ健氣さは并平まるく感激して坐は悄惚ざるのこと紀ありあ
あく畏りそこ退ぬさしばその次の日より并平はと真成は巴の尼を勧めるに用ひ
ざるとあく一宿ふして大田の荘ある藍玉院は来よられば巴の尼は院主の尼公へ恙なく
善光寺へ詣ろうしをぞうえあげ又并平が縛の趾おちもあく告おらせば尼公は殊ぬ

隣に召よせて見ゆるに面白く眉秀て麻加玉と見るまでに傳平なる美男なるに
辨舌水の流るごとく才智ものづくに顯れて憑一氣なる壯佼なれば尼公いとく
愛させゆひて且客房に退せ巴の尼を労ひて休足の暇をゆる。別人をして井手を
管待させゆひて。さる程にその夜さう。廣綱朝臣ハ例のごとく尼公の安否を訪ん
と。藍玉院に詣来ゆひつ。當下尼公ハ井平ら。繹の趣を告ゆひてその才貌を
稱ゆへバ廣綱ハてうち微笑こ寔に宜ごくゆへバ能あるものゆゑん試ゆ
一見まべ。そのゆゑ召せゆへうと他支もなく応ゆへバ尼公ハいよく欣びて臂ちうに
使る介添の老女を見えて云云とぞ宣へ。かくて又媼子井平ハ巴の尼に案内
せしゆく。廣綱朝臣に見まを。廣綱遥にこれを見て。媼子井平と汝ハ薄命に
才子なるに。尼公の老ゆ物語に咲つ。されも亦時に遇ぜ年来村落に退隱せ
ゆれバ辭歌絶てなし。鎌倉中もをりと狹浮世のるも咲まに。武藝文学

さぞあらん長途の疲労ゆるべきぞ。尼公も徒然にをりませバ。夜とともに譚る
明ごゆ誘ゆるに。と召びよせて四表ハ表物語に。まづその言辨応答を結り
試ゆ武備文事何れとく一ツ二ツ問ゆるに。井平ハ辭讓してみかもゝぞとのゝ
いゆめゆで。侮りゞ紀と多ゆるに。その才測るべうもあらゆ。ゆバ。ゆゆぞも嘆賞し。世ゆハ
うる奇才あるゆれ。大國を領しゆバ。ゆとうちて佐とせん。數頃の田園に老を
養ふ。今ハしてハせんまゆ。ゆうハあれども。いふしへの賢人の迹をうるに。孟子ハ
褊小の滕國に遊び武侯ハ西叟の蜀漢を佐う。和殿り村落の一隱士を
厭ゆ。ゆバ且くゆうに留ゆ。とゆもうくゆも扶持せゆ。いふうけ。うゆ。と問して
井平額をつき。御淀寔に勿ゆあまりて有ゆ。ゆゆ。ゆゆ。江廣光に
諾ひ。吉見殿の安危定うなゆゆ。件の力称に辞せゆ。ゆゆ。ゆゆ。ゆゆ。
苦ゆ紀るゆに且く分の暇をゆう。加賀の小松に赴て美邦の安危を

ゝぶ。時宜によりて又さらに見参に入いんぬるしを蒙らば、ちよかきたのが幸ひと
ぞ入て請しゝば廣綱はその信あり。義あるを稱て再び留めぶ。もちゝんゝ力及ばぬ
よりや加北へ赴くとも義邦あらば彼処にあらん。今さゝ定めがたくるべし。あ
彼人まあよりあくば直にあきさへらへ事よ他に身を寓ゐば怨こゐんとてあくて
後れるに。一両日ハ休足してゆるやうに發足せよゝ。ぢくも送懼の趣舎心中
亮察あるべしといと叮嚀にいさえさせく。衣裳一襲を贐し。菖蒲の老尼も
共侶に名残を惜せゐへども。既に帰をあらながら。十日も安居せべ紀ゐわ公。
加北へ赴紀く吉見冠者の安危をもゝば。又當院に参上して御恩を報ぶまん。
かくハ明暁發足と思ひ決てゆと潔く答ヤせバ。廣綱ハその意に任して更に留別の
盃をとらせて又拍ぐうゐぐうなりて。鶏鳴暁を報る程に井平ハ恩を謝して。
客房に行装し。巴の尼に別を告て。ひたう北國へぞ起行る。

作者云。足利より挾野へ赴くに今の順路を推紀ハ。新田木崎。太田八木。
梁田川崎。凡七驛を歴て。九里あまりなるべし。挾野より上野の舘林へ二里。
この間に船橋ゝ瀬ゝ趾あるとぶ。高崎の東方。勝澤田中のほとりより西ふ
丁ゐ。又足利より武蔵へ赴くハ上野と武蔵の封彊なる神名川まで四里半。
挾野に出てハ遠く遠。ゝ彼津ハ大和にも同地名あり。古歌にもよんでいとも名
くる奮蹟あり。むかしハ京に上るにも鎌倉へ赴くにも件の船橋ゝ渡しとぞ。
當時の順路なるべし。余いまゞ親しくこの地を踏にあらぬゝ遠近方位を詳にせぬ
ども。途に新古の差別あり。又その地名ハ存ずれどもその蹟むかしに異なるあり。今をもて
古蹟を辨じ。道路の順逆を定むるのハ彼桂に勝して琴を鼓るゝ比をいはん。

初輯第二十　絹總袴の游偵
假装束の情郎

刀野太郎時夏ハ巴の尼ゟ説破せられて憤ゟ堪ざるとも又いふとも甚べ敷れバ。
おほ疑ひハ釋ぬ。脆て其処より取てゝ帰宅し。日ハ暮て帰宅し。鶴ゟ
遣して吉見の為体を聞せしゟ彼宿所へハその暁ゟ目代ハ嶋室平師任四五十人の
夥兵を引て。共ゝと推あせゝ。留守ハ廣光ひとりとゝ。討ものの大勢と血戰して雑兵
許多ゟ痍を負し。その身も刀折ま力究て組布をゝ折ゟ。ひとりけ引く彼朝夷が
忽然と援来て師任を投折て雑兵を隔仆して。金竹叢へ投棄て廣光
共伍逐電して今ゟその往方を知ゝぞ。かくて師任主従ハ筋骨を打折られて
足あれども起とゝかハぞ。てあれども携るゟとく舌あれどものいふ能ハず。
守屋ゞ家臣萬なゝねど半日あまり藪ゟ籠て半死半生なりゝを知るもの
絶てかゝりゝを。ゝくて又加勢の雑兵二三十人ゞぞ来り。主の往方を索ゝて。
とゝくして藪の中ゟ仆るを見て驚騒たゞまく痍員を復ゟ乗て宿所ゟ

舁入ゝ程ゟ死ぬるもの過まゝそゞ中ゟ師任ハ項骨をゆゞべ腰骨を
うち挫げれ。臥房ゟ扶入られつゝその苦痛ゝ堪ゝもあゝぞ。節くハ布ゟて巻せ
皮膚ハ爛て膏薬をゝぬゝ所もあ。蹴鞠の如く腫あがり。葡萄の如く
痣つゝて。虻の息のゝあゝ。然ども命ゟ恙ゝ。ゝふハ横ゟ臥て。飯湯
をバよく嚙るゝ時夏これを笑あゝ呆ゝ。謀ゝことのゝくまでゟ。
なゝも果ぬゝものゝ。とゝのゝ中ゝ。膝を抱て嘆息し。おほ肺肝を
摧げども計策をゝ。ゝざしゝバ脆て臥房ゟ入るゝ。ゝ通宵いも寝ゝ。稍暁
ゝゝ熟睡し。疲を果ゝ。ゝ目ハ覚ゝ。ゝ亭午ゟぞなゝ。ゝまゝハ嶋室平が
病著を問んとゝ。鬢ゝき拭ゝ衣裳を更め。奴隷只知ゝ。ゝるゝ宿所ゟ
いゝ出ゝ。ゝ目ハ病床ゟ身入れて。あゝドハ臥て對面ゝ現綽の為体。ゝゝ
いやまゝゝ。當下室平ハ看病人ゟ扶られて。ゝゝ横ゟ背を倚ゝ。

ぬ。などて遅延やらん。朝夷よ拗ぢ捩て。低弱不具のあれとぞ。他友ハ
とまれかくまれ。なほ君が訪も来ざるべ。憑し氣なくもひあるは。説わくやと
怨ぜれば時夏愧ぢる面色。そいふ某ハと回答うけく。看病人ホをさんうへまバ。
室平ハそのうちを。ねて。奴婢ホを遠く退せ。刀野ぬ。汚穢とも。誘ふ。こへ
居よ。ねへと招くまふく。膝を進めて。後方をふりて。声を細め。某ハその夜さう。
美邦を追蒐て。遠く。藩屏を超ーうバこの大変を絶てもぐぞきの。日暮れて
帰宅あつれバ。そなの見糸。遅きよあるぞ。その故ハ如此くと。井平よ。謀逃
始より。美邦。逐電の為体。労して。功なく。神岩川より。ゑへ来る。終まぞ。ちも
なく。演説。某その夜。井平ぐ。還らざるよ。疑ひ起りて。美邦ぐ。逐電をそなく
推察きうれども。緯急なるもバ。目代よ。告て。加勢をもふよ。及バぜ。一騎馳よ
追蒐て。勝澤の。ほとり。ぞ。井平を追留ーぐ。天ハあぐ。明ぞ。烏夜あるふ。某馬を

乗ニ。ドて。二人。あぐ。捕ぬざりし。残念さよと。今ーて。今。ふうごとく。おのうらハ。室平
ぞて。嘆息ー。追蒐て。捕ぬぞとる。和君ぐ。如く。まきおくハこれよまバ。幸ひ。彼
朝夷ぐ。武芸。勇力。古今。獨歩とひべき。欠。凄天よりハよる。降らど。又地よりこ
涌ても。出ど。図らぞ。當所へ。来るの。欠。又。援んとて。埋伏をるやいづれ。あれど
人。おーて。鬼神よりなる。悍く。四十餘人の。雑兵さへ。彼奴。ぞ。よ。結果れ。
彼朝夷ハ。領主の。武威よ。憚ぞ。某よ。及をぬ。あてぞ。やをれ。師任。あるぞ。ぬて。
足利殿へ。吉見。冠者ぐ。罪。おきよ。をくもせ。又。時夏ぐ。ト。緒よ。與ア。密書。あよ
あ。汝ぐ。先非。をもくバ。ぞ。ぐ。為よ。許く。時夏ぐ。隠慝。を。顕せ。ぞ。ハ。ぞ。し。後
へ。ぞ。来て。汝ぐ。頸。をとるべきぞ。項骨よ。よく。覚よ。といふ。あでハ。耳よ。入ぞーぐ。
朽ぞ。くも。氣絶て。ぞ。ちのぞ。ぞ。宿所よ。扶入られ。く。頭。書よ。ぞ。
あると。ぞ。ぞ。人よ。ぞ。ぞ。れ。ぞ。ぞ。彼ト。緒よ。與られ。迦和君ぐ。密書。ぞ。ぞ。

朝夷が結び著さるものかん色さへぬへといひつゝく枕の下より一通をとり出て示せに
ぬ時夏ハ忽地に顔色変りて応せぬ室平頻に嗟嘆して和君何ぞの遺恨あり
て朝夷を殺さんと計ぬしよりハ孤ども師任がこの苦痛へ喧嘩の側杖撲れ
ものへなるをもつて五頭平が義邦をのてを嘗と指ても證据ハなぬそとぞ
あろ更に恐ひぬ再三ゝび五頭平を向もちとこで只管に早ってしことの悔ーさよ
と唧ゝまーく咳けハ時夏呵ゝとうち笑ひ女こーぬとを宣ひそこの一通ハ偽造
某固より朝夷を怨ると絶てをー何でふ法師を刺客ーて殺さんと謀るべき
これい和殿に疑せて某を陷さんとふくの謀る朝夷が更間に疑ひをーてる
伎倆に乗せられて義邦さへに五頭平が誣言をんとやひをー狡身の病著に心
さへ弱りぬハ日ごろに似げをー。ぐもちろいくいと辨に任て問るのを心ハ更に安ぐぶ。
肚裏にハこの人をまづ結果んとやひをーとハ思ぐて室平ハやひをーてうち点頭ー

あるき諄言面目ー。なぬ相譚ぬきとハあれども項の疵を表ぐる布があまりに
締りて息絶ハ一緩やぐやとぬを掛ぬバ時夏竊に狡ひぬを某が発程に
結びぐるを進らぬ許ーぬと遽ーく蒲団のうへに膝をもやを室平が後方に
項に巻ぐる布を解きぬぐるをもやをよくいに狡と問て結びぐる程に室平眼を細て
こハ慮外へぬハ汚色ぬを顧くハ今些ー締りそもよくいといへバ時夏布の端を
左右の手にまへぐ介らバ彩狡と力を先ぬを屈と締ぬバ室平ハ呟滅ぬ目を
白くしてぬ足を肉搔ぬ仰反ぐる時夏ハさもこそと膝に支ぐ頸骨をまゝ寄ぐるに
縊ぬ忽地息ハ絶てぐるへ人もやぬぐると件の布をもちやく後やを項の疵を
舊の如く巻菟くやをゝ死骸をおーー揮ーあるやくと叫びて頻に人を呼
ぬぐるハ着病人ホ走り来つ何ぞあやと問ぬを果バ時夏ハ室平が死骸に指ー
大息ーー死あるーーハ今までぬちよびぬ。ぬ煙ひをひぐ瞬間にぐる結て仰ぐぬを

時夏病床り師仕を繼る
時みつ

仆れ死ぬるとく医師許人を遣らびやまづ湯よ水よと呼ばせて城一やふ勅まバこハいうまと驚き立ち妃邸宅の男女数を竭して臥房よ集合て異口同音よ嘆れどもいそぐ届ん鍼灸補写の效なれバ枕方よまもり後方よまもり食潜然とうち泣めり。時夏も鼻をうちて某年来目代とハ莫逆の友なるその終焉よ面談せーハ泣てのまく。各位愁傷さぞあん所要あるべ行ぬべし心ゆまおく吹えぬと叮嚀よ慰ぬものが密書を袂より引入て告別して宿所へ退ぬさてもも室平師任ハ近曾その妻子まるて子ともなうるを固よりこが意よあハざるのをバ親類ども疎と遠ざけ。奴婢ハ只苛く使ひて栄利を旨とせーのみまバその夥兵さへくる時とそ力を竭せとおれバ誰ら時夏を疑よ妃寵よ重き撲傷ありバやうて墓おくなりるまとやバるもおうまろう。却説刀野時夏ハ已が宿所よ還りて又つくくとやふやう室平ハ已が資よなるあれとのこをバ渠尚ほを疑へまこの故よ絞殺して後やもくもろあり心よかるハ五頭平と曩かるれるもと興して彼進物を畧ら世ハ諸ひ客筏の術あきよ且くその餌を與ひしさうるれとも嫌らでやおは當國をもも去らぞ。いと果敢なくも土民ハよ生拘れる癡漢をバ縱救ひはるうもいく程もなく又生拘られて呵嘖よ堪ぞるうへさへよ首伏ることもあらんとそひよバ這奴を威して四境よ守兵を置るれバそがまくおハ脱れぐさしいうで苦肉の計を行へと欺きもやく憎しとやよ毛邦ハを陥る囮ハ一つ貝許牽ぬもれしハ後よ救んるるうで這奴を賺して自滅をとらせ一旦與せーとうへを世ハも人ハもうもせーとそさそ云云よ計をーらどの師任既よ死るるバ領主ハ別人もて又五頭平を鞫問せうれんのーそのらびよ彼癡漢ハ箇様ぐ実を吐バられも脱るく路ハなし。畳覚ぐ前ハを。

ともかくもせべかりしと心をつよ決めて密かに准備しつ小夜深く宿所をたちぬ。師任ぜ敷地なる獄舎のうへへ潜びるよ雨蕭こと降りそぼ。この夜殊ぬ暗くうるも案内知るとあるバ築垣を乗踰く裡面のゆうを窺ふこの日。師任死なしバ食忙然と呆れ果てその務を缺るの多くるさるバそのゆゑ嘗ざる獄卒さへ怠りそん人もとうも護めあるるバ時夏竊ま歎びく。獄舎の戸口より外を潜まし早蠅ことゆうれバ裡面より五頭平推と問時夏爪あて籠子を敲きさハ訝りそ時夏之和殿を救ひぬさんあるよ。竊来つるをあるざるもといつよ五頭平搔拐ぬぐ戸口より居より透して。憑しや力野ぬ。れ繋れるその日より心まちのをせらしても瀑妃所ゐるよあるざれいるもくとぬひつるよ前諾を違ぶてそ中も竊来ぬと今さら感謝ま堪ざるのをさていつふて脱ぬんと籠子よりをうけ密語バ時夏笑てされバ

うよ救ひぬバ難くもあるを況ど今些時早うを瀑くあるを脱去るも夜ぬ。ぐう遠く走りてふるくの蹤を埋めぬバ繰完しとハいへべらるぬ。餓てハ持ま難美あるん且兵粮しを肝要のを空しく時を移さんより腹を造りそ生ぬと真実ぬるく懐ゆう焼餅をとうぬ。籠子の間よりさ入れて遞与せバ五頭平ぬ喜ぶ歓び送るるくなる妃和君が懇切ぬぞ賞翫せざるべき時よりてハ百味の珎膳齢を延る仙丹を痩る肚ま実を入やてまるるぬと。件の餅をヨリちぎう噛りて旨しくと息をも吻ぜ食ひ竭して胃を拊今ハをや繰足ぬ願くハ一碗の湯を飲くと。と戯るく舌も焼ぬるぬぬ五頭平ハ苦と叫て仰ざるまよ倒ぬんとして膝組締ゐる餅ーや彼餅肚ま充ぬバ忽地ま五臓を役る大苦痛り毒菜まゐくぶるぬといへバ時夏冷笑ひ適五頭平明察なるぬれ美邦ホをとう逃ーつ師任まハ疑ぬ計ぬーるハみか齟齬ふ趣舎

うきうれしかるべし汝ぐロくゝ機密を洩されし吾倚ハ崇あんゝと後先ゝ
安らぐよりて目代師任を霜ハ絞殺しうかくて汝を毒殺せしハ機密をあるを
ハ竟ハ脱ぬ命をと諦てもゆく死ぬ悶搔ハ苦痛をまたのこゝ
不便のゝやと挙貌ハ説示されく五頭平ハ驚ぬ怒まて蘭子ハ携ゝ起んと
ハ轉輾び悶ゝしむ必死の呼吸もれ時夏冥土の伴侶唆著てこの怨
復さぞやと敦圍声も漸くハ細る篭の鳥猛きまゝも弱りて檻ハ鬱繋
如く膝折伏て息絶う時夏ハ外面ハ立在て窺ハ既て氣息ぬれハ
莞爾と笑て足ぞハ舊来ゝ退きつ又塀を踰芭を潜ゝ霜ハ
病所ハ入まうかくてその次の日ハ室平ゝ親族夥兵ハ領主の館へ赴りて
師任ハ病死又五頭平ゝ頓死のよを訴ゝ義兼ハ眉を顰め逆徒義邦ハ
逐電ゝ行方をゝざるハ師任ハ深痍ハ浚ゝ又五頭平ハ禁獄の疲労ハ

落命せゝといへハ穿鑿の度を失ハ似うきれ刀野時夏ハ彼顛末を
つゝめ嚮ハ支つるとおしハ太郎を召て問べ紀し師任ハ徒ハ且退出よとてうへれ
ゝさる程ハ刀野太郎時夏ハ俄頃ハ領主ハ招れていと晴やゝかに衣裳を整へ
ゝや告文所ハ来ハ入れハ義兼軈て對面して五頭平を生拘るものゝ為体
義邦逐電の縛ハ辻曲くハ問ゝ毎ハ時夏憶ゝる氣色ゝく言を巧みく
詭り飾ゝ井平義秀廣光ハも皆修羅五郎經任ハ一味同意のゝ為ハ達
義邦を追とめんぞ勝澤の松原ゝく苦戦せゝその夜の形勢又五頭平を
生拘るその日ハ縛ゝの為体ゝ紀ゝをハ良ハ辨伎利口ハ任ゝ彼を
貶して我を褒め國の為ハ力を竭ゝ亡父の汚名を雪んとて死ぬとも辞せず
彼徒を搦捕んとせゝ如く言委ゝく答ゝ義兼愚將ハ感ぜれども
刀野ハ親く吉見ハ疎ゝ是負とハ入ハその言ハ理あるべくゝ西れハ説

遂されて感嘆し。親にハ遥立なさる適愛を犯し壮佼らが此度和殿が誠忠ハ。
鎌倉殿頼家へ上達せん今いふ所の如くならバ彼義邦が徒ハ是逆遥の餘類に
渠が支黨なほあるべし。そのびくに穿鑿していよく忠勤を励みへなちらバ
本領安堵の事遠からじ。とまり制度あらむ迄年来扶持せしそれさへに面を立なバ
この時に努よくせよと褒奨して時夏を退せこの日鎌倉の営中へ騎馬の
使者をもつてらせて件の縡の趣をおちもなく注進を第三日の暁に因幡介
廣元の奉翰に執権時政の下行書を相添て義邦義秀ほを追捕のです。
骨相書をなえて速に國々へ徇ちらしむべし。又時夏が忠勤の為体ハ
思召循乳明に遂させて。勧賞の沙汰あるべしと義兼に下知せらるる時夏
これを俟へ喚ておなくを笑てぞねさろる案下某生再説井平ハ義邦の蹤を
慕ひて加賀の小松を心あてにいそぐとすれど途遥なる客宿をかさねて。

日ごろ歴てゆくゆくに佐味笠内が宿所を訪ねいぬる年より押営頼家親
しく仕まつりて在鎌倉とぞ聞えたるそのあるじもし家にあらねバ誰問て義邦の
安危を其処にしるよしあるべきならひすハそらだのめぞいふにもせん全べなし此
ころよりして街衢に義邦義秀いへバさらなり是が骨相書さへ掛られて穿鑿
厳重なりけれバ驚きおそれて其処を立退き他し郷に立よれバまたも又
是が骨相書ありかけれバ彼人々ハ本の因徒となりぬひしが又山林に身を躱して
縡静るをまちなむ欵愁に蹤を慕ひ徒に徘徊せバ是れ亦網裏の魚と
なり。なん駿河前司廣綱朝臣ハ年来退隠しぬへども鎌倉殿きこしめしてハ
なほ一族の上﨟に彼刀祢などへ身を寓なバ寃屈の縲絏を脱れ世のなかにも
ハなひけらくに菖蒲の尼公の愛顧を蒙り廣綱朝臣の見参して懇歎
さへなハりし再会の契あまれバ明く地に危窮を告て憑こなきらに処と

尋思つ姿を変笠をふかく尚消残る北國の雪を踏て山路を辿の辛く
して越路を過りて信濃上毛國あまく起て来れば露を宿る野中の
月を友とし瞻仰をよく風を流りそハ世よもすがら水鏡に影さへ曇なく
さくぬぐゑ旅ハ悲しきなかるを草も木も心なく虎の尾を踐む恐懼
患難比るを把るべきなるハあれども恙なくその夏四月十日あまりを武義國
大田の荘なる藍玉院を来著を比丘尼寮を起起く竊を巴の尼を問ひ
云云といひ入るを寮なる認るものあて遽しく出迎へこハ　くを来あぬ
巴の尼ハ三月の盡を豫ての志願なれバとて院主を別を告まり又國くを
廻んとて何処とハなく出て出ぬ彼尼今ハ何とかなる院ハもうく坊ん身が
なるをなりぬと想像るまで俟るべくをハもやうとくあるこ草鞋脱て
客房を誘引ついと叮嚀を啓待く尼公をかくと告まるせバ且く疲労を

休ひぐねて為れとぞ命ら井平ハ巴の尼をなるあるべども歓待ぞ
弥まていと憑ぬ心ぢ初て敢亦疲労を厭ぞ厭る裳ら況乗一件の比丘尼が
後を跟く菖蒲の尼公を見系せ當下尼公ハ井平が前諾を違へぬ一くく
事を裳を裳させく恙をもと問ぬバ井平ハ恭しく寒暖を述無異を祝し
さて美邦の往方ぞ追捕をさく厳重ぬて骨相書をもて索らるく
こうく又人のうく客宿の悪難日夜の恐怖彼とおく此となく偖やうを告まり
犯せる罪ハおろれども有繋を命ハ惜ぬものぬて慚を忍び姿を窶しん来
入るハ喪家の狗ぬ人を媚び窮鳥懐を入るを似くん欲命運竟を脱れこと
捜捕さるものあるバ亦是尼公の慈善をよらかん未期の十念系をりく来
世を出くせんるを再び手をそびと呼び沈て演らバ尼公ハ吹て嘆息しこと
うぬハ犯すとう。ぞうあるとても當院を一くび足を入るものハ罪の重なるきを

問ひ。みの刑罰を脱れう。法衣の袖よ掩ひてもいそで大敵の時よ和ハせんふく潜てねまうしとあ憑ーく必えあ。冥加ゝ袖をぬゝをまで井平ハ感謝ゝ慈ぶ。告ここのーあゝ者よりあゝバ亦義邦をもこの処よ置まほーゝぞやひ名且くしーく菖蒲の老尼ハ左右の人を遠ざけて井平をほとう近く招ぎて声を潜め。和殿ざうゝハ尼ゞ諾ひつ尼ゞ憑を伯ることうけるゝ欣いゝ者ぞやと問れて井平一銭よ及ぶぞ其既よ再生の大恩を蒙まう犬馬の労を盡さぞハいづしあ日う徳よ報ひん仰付さをひへと勇氣を含て応ーうバ尼公ハ歓び大ゝこなゝバ。然らバ匿さぞ告伯ゝんとゞ孫廣綱よ一個の女児あゝ且見姫とぞ名付ける。玄孫ゝうとて誇るゝあゝねど容止醜ゝゝバ心操亦風流ゝう。敷島の道よ長けゝ人ゝそハ曾祖頼政卿の口調を李び管絃の技を嗜てハ大叔母代柴加賀ゞ者ぞゝ似ゝう。青春ゝよトハ歳いまゞさをる壻ゝゝ伯ゝぞ深窓よ養れて異なることもあるそーよ曩よ和殿ゞ加北へとて。辞ーー去ゝうもの比ゝうぞ只何となく病ゞゝひて芹療医術ゝ效なーこの月よ迫ゝそハ拘狂ーきゝ必えて。夜とて安くハ睡り伯ゝぞその緯の為体物の怪をどゝ伯めゝべーゝるゝ廣綱ハ風淫の病着あゝ。五十保の温泉よ湯治せんとていぬる月ゝ下浣上野へ赴ゝ。その留守ゝて姫ゞ難病。されバとてゝるゝと廣綱よ告るとも。武士ゝるゝゝゝゝ他ゝゝゝゝ。いぞう勝て還るべ。そハゝゝよ尼を恨ん家よ三人の花堂あゝゝ下河邊小三郎高吉頼政の郎等。下河邊三郎。ハ廣綱よ従ひて。上野へ赴ゝ。間中隼人守直猪隼太守資ゞ。ハ本貫遠江よ赴ゝ。高僧験者のよを借んハこゝも亦他ゝゝゝゝ。廣綱ゞゝゝよ稱ハーハ明暮よ拘をゝ尼ゞ珠數ゝて禳へども。癒るべうもあゝバ。和殿ハをさく武藝よ長ゝゝんどゝゝゝと廣綱ハ攢ゝゝ。いぞ墓目の法ゝ禊ゝく。

物の怪退治をあらばこそ幸なし。憑むといふこのすくうけ。他人の
おく説示さしおく井平ハ困果る頭を擡とうけあらいひぬ。おんなごゝろあ
ハ火を踏こ刄を握るも推辭まべなまあ〳〵祇ど武藝未熟の某かとが晴る
墓目をよくせんや特ハ家ハ近衛のゑん時内裏あく怪鳥を射あ頼政卿の
侍子孫刀祢ハさてこせあハぢる氏もかた下郎として弓箭のすよ與らバ孔子の
家ハ道を講ず。釋迦の墨ハ法を説く縁ハ仮く嗚呼とやいん己をあるぬと
いふも過うゝ。この淺ハ紆させぬへうと辭を竭して固辭せしかど尼公ハつゆく
紆ー安ぜいるくそしハ人をたゞで身を脱るの辭之名をる兵あ〳〵バを。射損じる。
と恥ともいふあすや和殿ゞ志をんじうも誰ら拙しとて笑ふべき固あり墓目ハ
修法ハあるて正鵠を爭ふものあるぬるのをぞ学び沒こバくもあるぬ
所行あるべし。老るあるおをいはそうて死人のこゝろやとゝくを良あ講意

井平まもく慚愧して額の汗をかし拭ひかくまでハ思吾ハ脱るをハ路もひを感
おさでるハうれおゞう量ゞくいへどもつゝふあるべらゆゆとやうやくハ諾ひしが尼公ハ
文ハ欲びつゝ尔らバ今宵更闌て姫の臥房へ案内をさん且退死て疲労を休へ
心ゞうふ准備をせよこいと真成ハ相潭ゆひつ堂高く打鳴ー專女を呂びて
井平を如此くと曳えゆべ。おゝろ沒果て客房誘ふつ郷食膳をうて浴させ
髮を結させどもる程ハ夜ハ子二の北おぞあるぬかくて新ー死衣一襲ハ
縹縄の素袍烏帽子を賜てゝ井平これを裝束死く再び尼公ハ案内
いと寞れうと死ざふも一際目ふ美男るハ又華やうハ裝ひ立てハ〳〵ゆゆ
中て愛敬つ死ふ尼公いうちゑくうちわく笑を通愛ゝ死壮士ゝあ弓箭ハいろハ。
と問へバさゝ墓目ハ満箭を前をて用ひへ。あハそのの顧あゝ雷上勢の
おん弓ハ兵羽透明のおん征箭ハ頼政卿より偽ましく當家ハ殺めゆおん

みちゆくの
面影の沢
乃花ちつと
かつらる乱
れて恋や
るらるむ
かつら姫
おさく様

井平
貴綱

し彼弓箭を貸あつぐ某弓術未熟といふとも名ある武器の威徳あつて物の怪退散せん故慮外の所望よ身を顧ぜいと憚ることかれとも再度まぢかくいとちかくしーぐ尼公ハ是ハ点頭件の弓箭ハ廣綱が殊よ秘蔵の物なれども何ぞ姫ぐるべとうしさせて竊よ貸べ夜なを深つとくくと頻よいそぐし立あつ且見姫の方ざあ中も豫くあろをゆうえ梭枝といふ女房ぞ若堂奴隷を相副て井平よ案内せよとそ迎ぞくよ遣しうり尼公ハ梭枝を召近つけて かほ又縛のあろをゆるさせあやこよろも専女を副て廣綱の宿所ぞ遣しあふ藍玉院とハその間いと近ろれバ程もなく衡門を進ぞ入るふ有繁國司の餘波そ茅葺ろれぞ家造り田舎なぐるよ都備ぐうり井平ハ誘引きぐく左邉の築垣を遶り入るふの処庭門あり裡面ハ名樹殿あるべし夜目かれバ定ろなるぞ梭枝ハ先よ走て渚折戸をほとくと敲く程女の童ぞ紙燭秉しぐる老女出て井平ぞを迎入き廊よ母屋ぞのぼりてそれ彼ぞ挑灯ぞ その管待よろづ密やかそ男子ぐるものを見ぞ且くして件の老女ハ竊よ弓箭をあて来つ棗を解ぞ胡籙をおーぞ立て井平がほうてさーよせ見あん雷上動の弓兵羽透羽の箭ぞ伝り物の怪ハ丑と寅の時の間ぞあんいと徒ぞ出ぞ ら。所用あらバ女の童を呼せあへと慰めて食奥あるぐる所よ入ぞぬ井平ハ彼弓箭をとりあげそ戴ぞつ尋常のものよあらぐれ瀬よ立ぞハこの弓この箭を取るよりあんや一期の面目このうえかとぞへバ心よ勇あり。よりや悪霊妖怪ありとも漏きぐめと弓杖衝そ且見姫の渡所こ おぼーき一室のこるぞよ掛ぐる翠簾を見入ぞ来て坐て通宵をとう護りてこう この殿持ぞ長ぞなしバ編ぞ嗣巻ぞ第三編の刃ハ解ぞ生像あるよ錄ぞ。

朝夷巡嶋記全傳第二編巻之五終

吉川弘文館

編述

曲亭馬琴稿本

千形仲道
棚加正臧

浄書

荏土

出像

一柳齋豊廣畫

京攝 六剞劂合刊

彙人

春王正月
文化四丁卯歳
吉日發兌

江戸馬喰町三町目 若林清兵衛
筋違御門外平永町 山崎平八
大坂心齋橋唐物町 河内屋太助

江戸著作堂主人隨筆並國字小説畧目 浪華書肆 文金堂藏版

あゞ佛の記 隨筆大本 六冊近刻

この書は名つゝの婦女の筆もてみゆもあゞ佛さとしといへる仏はあゞ仏なれどもこゝに持仏の例よりそゝくもぼめるハ人欲の私ごゝろなんとの使ゝもゝ又ゝゝゝとみゝゝ滅ゝゝあゞ

柳川重信画 全五冊 去ル子十一月より愛出ス 八犬士のうち犬塚去乃犬川荘助が列傳ゆゑ此の編はあり

歌川豊廣画 全五冊 来寅四月一日より愛出ス 奥州厨川の經任退治より起りて義秀鎌倉よりかへるまで

里見八犬傳第二輯

朝夷巡嶋記第三編

燕石雜志 隨筆〻佳説奇談多〻

俳諧歳時記 四季の詞細注便宜の一書〻 全 六冊

月水奇縁 全 二冊

以下出入あり本

新累解脱物語 全五冊

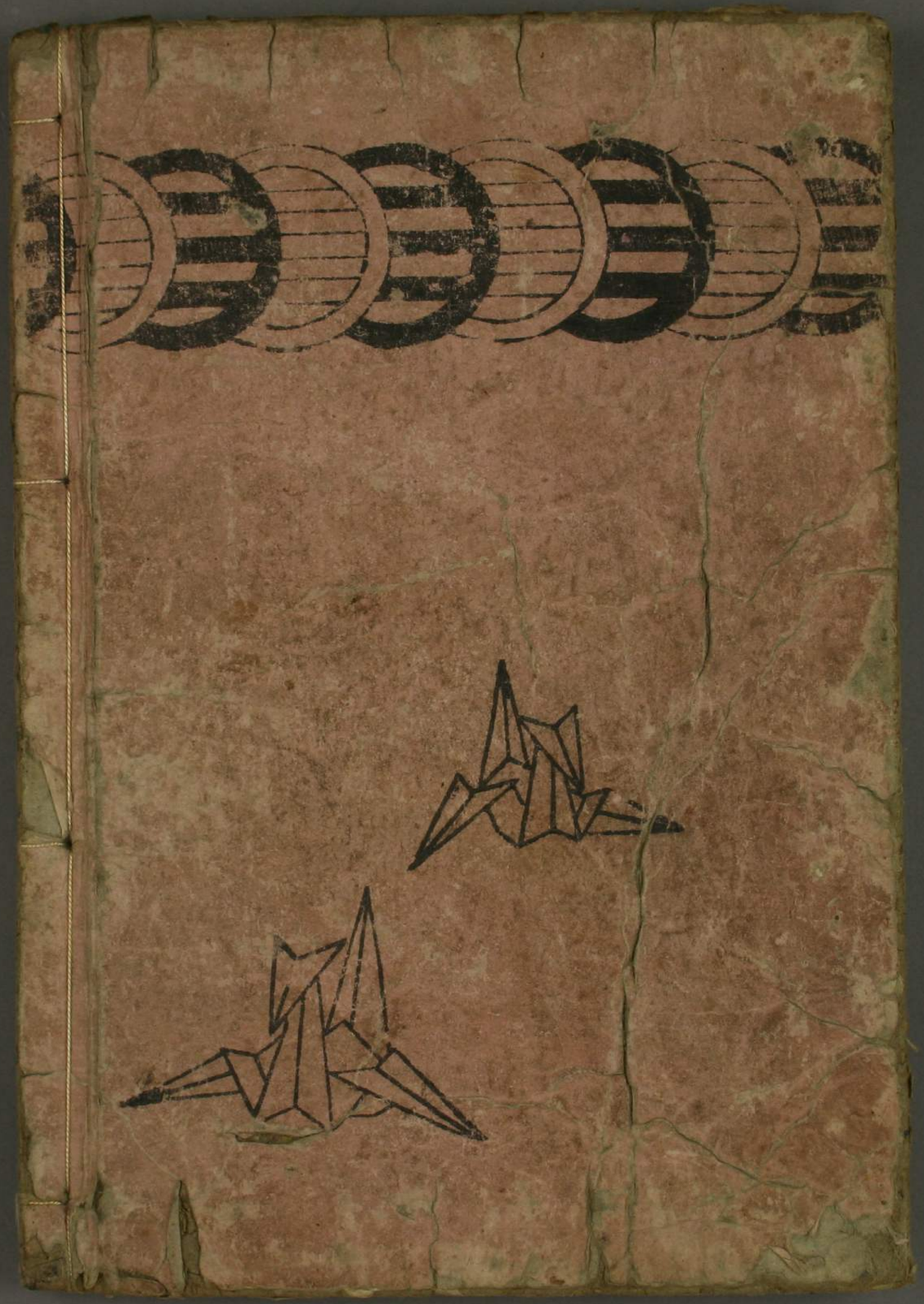
北齋画 全五冊

昔語質屋庫 春亭画 全五冊

松染情史秋七草 豊廣画 全五冊

曲亭家傳神女湯同精製奇應丸同婦人つぎ出妙藥并ニ曲亭画賛扇ホ取次仕ル

拙舗累年書籍ヲ鬻キ近來都鄙一般書房ト弘通ス且ツ諸
府縣廳或ハ諸先生ノ御藏版アル毎ニ幾兌ヲ命セラル故ニ新板
圖書ハ積テ以テ洩スコトナシ加フルニ和漢洋ノ書冊ハ今古ヲ不論
亦以テ備ヘ置ケリ仰冀ハ書ヲ購フノ君子其多寡ニ嫌ナク弊店ニ
就テ御買得アランコヲ

文榮閣主人謹白

製本處　前川源七郎
大坂府下心齋橋筋
北久寶寺町北之番地